

# 設楽発掘通信

No.42  
平成30年  
11月号

## 石原遺跡の地元説明会を行いました

去る十月二十七日（土）、川向地区の石原遺跡において、今年度の発掘調査成果を現地場で説明する地元説明会を行いました。当日は、午前十一時の開会直前まで雨天だったため、調査区内への立ち入りが危ぶまれましたが、急に好天となり無事行うことができました。ご参加された人数は三十名でしたが、発掘されたばかりの遺構や遺物を熱心にご覧になり、地元での過去の暮らしぶりをご教示いただく場面もありました。スタッフ一同より深く感謝申し上げます。

『設楽発掘通信』No.40（九月号）で開催をお知らせした際には、一八B区の具体的な遺構がまだあきらかになっていませんでしたが、その後竪穴建物跡一七〇SIをはじめとする縄文時代中期前半を中心とする遺構が多数検出され（二頁を参照）、地元説明会でお披露目することができました。

（愛知県埋蔵文化財センター  
永井邦仁）



写真1 出土遺物の展示



写真2 石原遺跡の地元説明会（18B区縄文時代の竪穴建物跡170SI付近、南から）

### 石原遺跡の調査

秋も深まり厳しい冬が目前に迫っています。石原遺跡では、調査区の西半分にあたる十八B区の空中写真撮影を終え（写真3）、現在は撮影前に探ることのできなかつた部分の補足調査を行っています。

十八B区では、十八A区と同様、自然流路と土石流の痕跡が広い範囲で確認されました。調査区の南側では、その土石流や近代の耕作による削平を免れて、遺構が残存していました（写真3「遺構面残存範囲」）。みつかった遺構は、竪穴建物跡が一基（写真4一七〇SI）のほか、くぼ地に遺物が集中したと考えられる竪穴状遺構や土坑類があります。これらの遺構内および周辺からは、縄文土器、石器類が多く出土しました。

土器を観てみると、縄文時代早期から晩期まで（約七千〜三千年前）のものがあり、時期幅がとて広いです。中でも中期前半（約五千五百年前）の土器が多く（写真5）、石原遺跡では、その時期に人の生活が最も盛んだったことがわかりました。また、タケやササのような中空の植物等を加工した施文道具を用いて、線を描いたり、連続して押し付ける文様を「半截竹管文」と呼びます。この時期、設楽町域にとどまらず東海地方では、写真のような土器が流行していたようです。

（安西工業株式会社 鷺坂有吾）



写真4 170SI完掘（南東から）



写真5 縄文土器出土状況



写真3 18B区全景（北が上）

### 滝瀬遺跡の調査

滝瀬遺跡では、調査区東側の十八C区の補足調査が終了し、調査区中央の十八B区西半分の遺構検出や、遺構掘削を行っています。

十八C区では、補足調査中に新たな発見が三つありました。一つ目は、土坑（七七二SK）から縄文時代晩期（約三千二百年前頃）の石刀（祭祀具、詳細は4頁を参照）と台石がみつかりました（写真6）。石刀は下端部が無く、埋土の堆積状況から土坑に埋納されていた可能性があります。ここで何らかの祭祀が行われていたのかもしれない。

二つ目は、十八C区では集石遺構が七基見つかっていますが、その中の一基（写真7上・七五九SS）を掘ると、下から石が遺構の底に並べられた状態になっていました（写真7下）。石は火を受けて赤くなっています。遺物はみつかりませんが、同じ層からみつかりつつある遺物の時期から、縄文時代早期（約一万〜七千年前）の遺構と考えられます。

三つ目は、貯蔵穴と考えられる大型土坑の中に石が配されており、（写真8上・七八四SK）その石を取り上げると、下に複数の縄文土器片が敷き詰められていました（写真8下）。

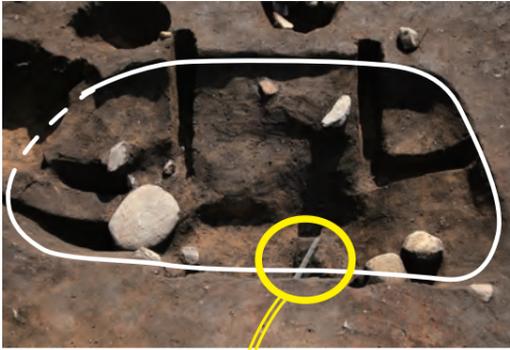


写真6 18C区772SK（北東から）



↓上の石を外すと…



写真8 18C区784SK（西から）



↓上の石を外すと…



写真7 18C区759SS（南東から）

十八B区では、縄文時代の竪穴建物跡が、可能性のあるものも含め、七基みつかりました。竪穴建物跡は、十八B区北側のやや地面が平坦な場所にまつまっています。そこは、おおよそ南向きの斜面で、日当たりが良く生活しやすかつたのかもしれない。

（安西工業株式会社

高木祐志）

## 滝瀬遺跡出土石刀について

滝瀬遺跡一八C区では、縄文時代後期初頭から前葉（今から四千四百年前（四千年前））の遺構・遺物が多く出土しています。特に、配石をはじめ礫群を含む遺物包含層からは、多量の遺物が確認されました。さらに、その後の縄文時代晩期以降（今から三千年前以降）の遺構・遺物も所々に認められ、当地では、晩期に入ってもヒトの営みがあったことが明らかになりました。ここでは、三頁に紹介されています、石刀について詳しく説明します。

図1の石刀は現状で、長さ一八・八センチ、幅二・六センチ、厚さ一・七センチ、重さ一三八グラムです。全体は細長い棒のような形になっていますが、図の上端側は次第に薄くなるように整形されています。断面の形を見ますと、一方のみが鋭く尖り気味になるもので、刀のような形状となっています。また、図面上端から約五センチの位置までは、横方向の線刻の間に、連続する斜めの線刻が交互に計三段にわたってつけられています。同様の



図1 滝瀬遺跡出土石刀



写真9 石刀装飾部分

装飾は上端から十センチほどの位置にもあり、一・八センチの長さで、計二段にわたり施されています。表面全体は丁寧に磨いて整えられていますが、製作時の敲かれた痕跡が残っている部分もあります。下端側は欠失していますが、縄文時代の使用当時に意図的に折られたものと思われます。使用石材は、緑色片岩で、深緑色を呈しています。なお、石棒石刀類は赤色顔料が付着している場合が多いですが、この資料ではその赤色顔料の付着痕跡は確認できませんでした。

石棒石刀類は、縄文時代後期以降の集落跡でよく出土する、代表的なお祀りの道具です。完全な形で出土する場合は少なく、多くは、敲いて壊された状態で出土します。東海地域では、その壊された細片の両端あるいは長軸方向に溝を施して、石錘のような状態に再加工されたものが出土します。

滝瀬遺跡出土の石刀と同様の装飾をもつ石棒石刀類は、奈良県の橿原遺跡を代表例として広範囲にあり、装飾の文様から縄文時代晩期前半のものと考えられます。滝瀬遺跡の資料は、装飾部分を中心として形をよくとどめており、この地の縄文時代晩期の活動の様子を知る貴重な資料であるといえます。

（愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁）

# 設楽発掘通信

No.42

平成30年11月号

編集・発行

公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

愛知県埋蔵文化財センター

〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方8022の24

電話 (0567)67-4161【管理課】 4163【調査課】

ホームページ <http://www.maibun.com>

Facebook <https://www.facebook.com/maibunaiichi>

Twitter [https://twitter.com/aichi\\_maibun](https://twitter.com/aichi_maibun)

印刷・協力

安西工業株式会社